



# 学術再構築の新しい視点

佐藤 文 隆

### 専門家への信頼

官僚や金融人から医師や教員まで、専門家といわれる人間への世間の信頼は地に落ちている。また国立大学の法人化が学問研究の危機であるという大学当事者の訴えに世間は聞く耳をもたない。これも、信頼がいつの間にか喪失していることを知らされた。

専門家の知に依拠して社会を運営するようになって百数十年だと思うが、それを支えたのは専門知識への信頼であった。科挙で官僚を選んだ歴史もあるが、これは人間の選別に学問を用いただけで学術知の利用ではない。宗教の知、職人の知、暗黙知、伝統の知、・・・などとの対比でこういう知をいま学術知と呼んでおく。それが主役になれたのは「体系性」と「品質管理」という優れた特性にある。前者は包括的、標準化、分割可能、などを指し、公教育の訓練で、常人を専門家に育成できる。後者はマーティンのいう科学者のエートス（公有、普遍、無私欲、懐疑）で運営され、ピアレビューで知の品質管理に精進している。これを基礎に世間との関係を啓蒙から信頼へと発展させてきた。

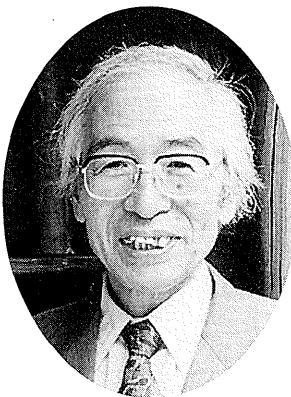
20世紀後半、この学セクターは量的に拡大（100年で100倍）し、その社会効果が拡大した。しかし現在、「信頼への疑惑」が横溢している。もたらされた「益」も社会の不安定化・安全破壊の要因と見られるようになった。専門家の集団も既成勢力と化して顔が見えず、自己の興味に熱中して「効果」に責任を果さない、公教育をそんな学術の専門家に託していいか、と、学術の知と人間の信頼が問われている。

### 「持続可能な」科学

私は1995年に「科学と幸福」（岩波現代文庫）という本で、自分が見てきた20世紀後半の科学の姿は特異な時代の拘束のもとにあり、早晩、激変すると警告した。予兆が現実の激流になった現在、様々な場面での学術の再構築をはかる論議で新たな判断基準が必要になっている。ここでは次の3つを指摘したい。

- 1) 知のクライアントと知の品質管理
- 2) 社会基盤なしに知はない
- 3) 知の在庫過剰と流通停滞

業界全体の仕事は基本的にはクライアントから持ち込まれるが、この業界が売り物にしている品質管理のため、クライアントに影響されない、業界独自のカルチャーがある。それを失えばこの業界にクライアントも付かなくなる。「クライアント」には、環境やエネルギー、南北格差や国際関係、での安全や、教育や文化界とのかかわりなどと多様であり、新しい製品とビジネスの産業界だけではない。もともと学術知には「実証的」と「批判的」の2つの側面がある。前者はクーンのいう通常科学であり、パラダイムに囚わ



れることで生産性が上がる。後者はポPPERのいう科学真理の反証主義にも通じ、誤りを「正す」ことを目指す。これらは「真理」の二面、「加える」と「外す」、に対応する。

学術知はそれが流通する社会基盤なしには無意味である。電線や電池がなければ固体電子論は意味がない。これは歴史を見れば自明だが、我々はしばしば後追的に、完成した科学の展開として技術世界を逆投影してしまう。また職業的に見ても、知の専門家に卓越性と信頼があり、経済的にも妥当な地位が与えられていなければ、後進が続く「持続可能な」制度ではあり得ない。いろいろな顕彰制度も社会基盤の一部である。学術知の基盤は「好奇心」だという言い方は、孤立した個性を過剰に描くもので、不十分な言い方である。学術知の基盤は信頼にあるという方が現在のである。知の中味も人間集団も、もっと社会基盤を前提に語られるべきである。

この社会基盤とも関連するのが三番目のポイントである。現在は在庫過剰で販売強化が必要だと思う。販売強化でクライアントとの関連がある。在庫と流通のバランスは学術知の「持続可能な」展開の命運を握っている。近年、「純粋科学の危機」が叫ばれるが、本当の「危機」は現在の当事者の“当て外れ”よりは次世代に消滅することである。

### 市場原理の限界

「持続可能な」の観点から危惧されるポイントを一つ指摘したい。しばしば、「バランス」を保つ仕掛けとして市場原理が言われる。もちろん「市場」を株価という狭い意味ではなく、環境や安全という「市場」の期待にまで広く解した市場原理である。この広義の市場原理であっても、それに「バランス」とりを委ねることは危惧される。教育と「品質管理」を含む、独自のカルチャーの保持と、人間を介した知の伝承を断ち切ってはならない。定性的に社会的に了解されたとしても、現実には、国際的に見たサイズの問題に帰着するであろう。

「物理学の世紀」を演出した物理学の巨大な姿が推移するのは必然だと思うが、物理学という手法はより広範に展開していくものと考え。既得権益保持の視点でなく、上述のような「持続可能な」の視点と信頼で結ばれた公共性の視点で論議されるべきである。

プラズマ・核融合の分野は、私の感じでは、社会的に開かれた目的(期待)を持ってはいるが、アカデミックには物理学の諸領域で囲まれたものである。この状況は「アカデミックな存在感」を出すには微妙な位置にある。物理学は対象を越えた一般法則による「ものの見方」を提示することにおいて至福の境地に到るといって「美学」を保持している者であるが、この分野がそのことにおいても存在感を発揮されることを期待する。と同時に、このような「美学」や「アカデミックな存在感」を尊ぶ専門家の集団が枯渇すれば、科学的な営みは嘗ての大教団のような権威ビジネスとギルド的技術集団に中に再び組み込まれていくのではないかと考える。